風信

平和の本で戦争をなくしたい

後藤　修平

私は1971年生まれで冷戦時代の子どもだ。親の方針だったのだろう、低学年の頃、原爆写真展を兄と見に行かされ大層ショックを受けた。同じ頃『猫はいきている』（早乙女勝元・田島征三、1973年、理論社）という、東京大空襲の絵本も読んだ。素手で地面に穴を掘り、炎から赤ん坊を隠そうとする母親の爪が全部はがれる。ぞっとする感覚は体が覚えている。

中学年頃になると「はだしのゲン」から目が離せなくなった。第3巻がとにかく怖い。被爆した青年画家・政二さんは全身やけどで包帯グルグル、膿にまみれ蛆が湧き、ものすごく臭い。その上「放射能はうつる」と家族からも厄介者扱いされ、痛みと怒りと悲しみの中で死ぬ。被爆した上に差別される、その世間の冷たさは、小学生の心を打ちのめすには十分だった。

今だったらこういう読書は「トラウマになるからNG」なのだろうか。

そんなわけで政二さんみたいに死ぬのが怖く、どうやって核戦争から逃げるのかは、子どもの頃の深刻な関心事だった。

もうちょっと知恵がつくと、戦争しないためにはまず戦争の実態を知るべきではないかと思い至り、中学生くらいから漠然とジャーナリスト志望になった。ベトナム戦争報道の石川文洋氏は、私にとってあこがれの存在である。『戦場カメラマン』がちくま文庫から復刊されているので皆さん、ぜひ。

度胸がないので戦場カメラマンはやめたが、就職活動ではマスコミ志望だった。しかしとにかく難関で、書類選考すら通らない。大手に落ち続ける中、徐々に児童書のある出版社に絞っていったのだが、それには一応理由がある。未だに戦争という犯罪を放置し続ける大人にはもはや何も期待できない、と思ったからだ。

偶然欠員募集をしていた童心社に即応募。面接で絵本や紙芝居のことを訊かれたがよくわからない。しかし私は童心社に『ベトナムのダーちゃん』など、かなり尖った仕事があることは知っていて「平和の本を広め戦争をなくしたい」と真剣に言った。そこを買われたのかはわからないが、内定を貰い入社、今に至る。

子どもの本と紙芝居は何かを教え込むものではないので、当時の自分の青臭さや偏狭さには恥じ入るばかりだが、それでも童心社には、正面から読者に戦争と平和について問いかける本や紙芝居も出せる出版社でいてほしい。子どもに関わる仕事だから、平和の問題を避けて通れないと私は思っている。

連載の最終回で、ガザのニュースが飛び込んできた。戦禍におびえる子どもの恐怖は物語ではなく現実だ。自分はどんな大人になったのか。「期待できない」大人になっているのではないか。

連載を読んで下さった皆さんと新文化の芦原さんに感謝申し上げます。

（童心社代表取締役社長）